

最終講義 (公的扶助論) : 2007 年 1 月 16 日

# 私の社会福祉研究の原点

——社会福祉をどう学ぶか——

(講義要旨)

中 井 健 一

- 1 社会福祉の仕事と研究の原点は自分の生いたち
- 2 公的扶助論をどう学ぶか
- 3 結論「福祉が人を殺すとき」

## 1 社会福祉の仕事と研究の原点は 自分の生いたち

私は名古屋で生まれ、そこで6歳まで育ちました。6歳で父と死別、母子家庭となった。ちょうど太平洋戦争が激化するころで、いよいよ名古屋も空襲が目前となったため母子家庭は強制疎開となりました。疎開で岐阜市に移り住み、華陽小学校に一学期だけ通ったころ、岐阜もあぶないと言われて母の故郷である白鳥町前谷 (今の郡上市白鳥町) に移住し、そこで村の人々に支えられて成長したのです。

なぜ話を自分のことから始めたかという、このころの体験が私の社会福祉研究の原点となっているからです。まず戦争があります。戦争は人の命を紙よりも軽いものにしていく、社会から命を奪ふ空気を奪っていきます。父は直接弾にあたって死んだわけではないが、命や人権が重んじられる現代の

社会だったら、たぶん死ななくてもよかったのではないかと、したがってその後の母子家庭の辛苦を味わうこともなかったのではないかと、そう思います。直接の戦争体験は、岐阜時代、毎日のように米軍の偵察機が飛んできて超高空を、ほんとうにおもちやの飛行機のような大きさに見える高空を飛んできて、やがて降下してビラをまいていく。子どもだから面白がってビラを拾いに走る、よくまわりの大人からドヤされていた。しかし深刻な体験は白鳥町に移住したときでした。徴兵されて出征していく兵隊さんを駅まで見送りにいく、それが重要な学校行事でした。万歳、ばんざいの声の中を村の青年が列車で出ていくわけです。やがて数カ月もすると、つい昨日のように鮮明に覚えているその人が白い骨箱になって帰還してくる、再び駅に出迎えにいくわけです。これは面白がってビラを追っかけていた少年には強烈な印象を残しました。

## 母子家庭の苦しさ

もっと直接には、母子家庭の貧困の辛苦を体験したことが社会福祉研究の原点となっています。今でも母子家庭は後ほど述べるように生活の困難に直面していますが、現代の青年には当時の困苦は想像を超えるものだろうと思います。今でもジェンダー関係は濃厚ですけれども、女性の教育水準は格段に上がりました。しかし当時の女性、私の母のように明治生まれの女性の大部分は12歳、小学校（国民学校と言った）を卒業すると、特に農村ではほぼ全員が糸引き女工として製糸工場に働きに出て一日十数時間の労働にあけられた。『あゝ野麦峠』（山本茂実・朝日新聞社刊または角川文庫版）の世界です。勉強するひまもキャリアを身につける時間もあるはずがありません。この人々がつれあいを失うと、女工時代と同じように低賃金の肉体労働しか働き口がなく、その働きで数人の子どもを育てるわけです。私は幸い妹と二人でしたが、それでも農家でない母は子どもたちに明日何を食べさせようか、それば

かりを考えていたようです。私の記憶では真っ白いご飯は盆と正月、普段はいいほうで麦半分の麦飯、お金がなくなると小麦粉を団子にして食べていましたから、学生の皆さん、当時の生活の困苦を想像してください。

母は粘土を成型して作るコンロ工場、製材所などを転々としていたが、その中で一番楽な仕事は白越通運という運送会社です。山奥から馬車が材木を駅まで運んでくる、その材木を通運の陸仲士が肩に担いで貨車に積み込む、親方がいて30トン貨車一杯いくらと請け負ってくるわけです。母は親方に雇われ、請負金を陸仲士に配分する仕事をしていました。「さんちゃん」と呼ばれていた、体が小さく、肩に座布団をくくりつけ、いつも皆のからかいの対象になっていた仲士の人がいました。当時は知らなかったのですが、今から思うと知的障害の人にちがいません。私は母が配分金を計算するのを見ていて、「さんちゃん」0.8、親方は1.2になっとる。現場で見ていると「さんちゃん」はいつも太くて重い材木を座布団の上から担がされている。親方は細い材木を担いでいる。この不合理を母や親方に食ってかかった、言葉は悪いが、要するに子どもの分際で抗議したわけです。後に聞いたのですが「この子は大人になったら共産党になる、気をつけろ」と親方が母に言ったそうです。社会で不利な立場に不本意ながら立たされている人々への思いは、たぶん自分の生活体験によってつくられたと思うんです。私がこう言ったからといって学生の皆さん、「自分はめぐまれた家庭に育ったから、とてとても」と思う必要はありません。体験というのは生活体験だけではない。最後に話しますがリベラルアーツと言って、すぐれた文学、映画に接して体験を広げることが大事です。小さいころ「マッチ売りの少女」の童話に接した人がいるでしょう。少女は街かどでマッチを売っておばあさんと二人の生活を支えている。ある雪の夜、少女はあまりの寒さに商品であるマッチを一本すって暖をとった、そのとき炎の向こうに亡くなったお母さんの顔が浮かび上がった。少女は夢中でマッチをすって一夜を明かします。翌朝街の人が少女の凍死体を発見することになるものごとです。すぐれた文学に接

して心を揺さぶられることもまた人生の体験です。こういう体験をした学生の皆さんは、きっと街に捨てられた子、父母を失い児童養護施設でくらす子どもたちの心を理解することができます。このように体験とは単なる生活体験だけではないということです。

## いい先生にめぐりあえたことと社会への開眼

先に「村の人々に支えられて成長した」と言いましたが、小学生のころ、新聞配達をしていると村の家々で「これ持ってけ」と柿やら餅をいただきます。中学の時そんな先生にもめぐりあえた。散髪にいかないからぼうぼうの頭をしている。「中井ちよっとこい」と言ってバリカンで頭を刈ってくれる先生です。中学3年の時、もったいないからと言っていくつかの奨学金が受けられるよう奔走してくれた先生にめぐりあった。まだ高校進学率が25から30%の時代です。そういうわけで私は郡上高校に入った。本来は中学を出て働くつもりでしたから今でも感謝しています。高校はいきなり進学クラスに入れられ、夏休みも大学受験の勉強でしぼられていた。しかし私は大学へ進学できる環境ではない、それは自分が一番よく知っているから、すね者になっていて受験勉強はほとんどやらなかった。そのかわり図書館で本をよく読んだ。日本文学全集は幸田露伴からだいたい川端康成までほとんど読んだ。その合間に図書館主任の先生がこれ読めといろいろ持ってきてくれる。その中にスウージーとヒュヴァアマンの『なぜ社会主義を選ぶか』という新書版一冊があった。私はこの世の中になぜ豊かな人と貧乏人がいるのか、中学時代からずうっと疑問に思っていたから、この一冊で、よく言う目からうろこが落ちたのです。貧困をうみ出す社会構造がよくわかった。そのころはまだ社会福祉研究なんて思ってもみなかったが、これが最初の社会への開眼でした。

しかし私は幸運でした。御母衣ダムの工事が始まったのです。私の家は旧

国鉄、今の長良川鉄道の終点、北濃駅の近くにありました。ダム工事の資材を北濃駅まで鉄道で運んでそこからトラック輸送をするのだが、家が資材置き場の拡張工事で立ち退きをせまられたのです。いくらかの立退き料が入ることになり、私が大学へいっか、妹が高校にいっか、母は悩んだと思いますが、結局私が進学させてもらった。妹は中卒後郡上八幡電報電話局（今のNTT）の電話交換手になり、郡上高校の夜間部で学びました。進学といっても四年制大学は学費が続かない、いろいろ探していたら大阪府立の社会事業短期大学があった、そこで社会福祉を勉強しようと入学しました。この大学は国立よりも授業料が安く、短大だが実に多彩な教授陣がいて、アナーキストから、正統派マルクス主義、フェビアンから右端は皇国史観まで実に多士済々の先生から、イデオロギーの洗礼を受けた。理論的に影響されたのは孝橋正一先生（社会福祉原論）、私の社会福祉原論はいまだに孝橋理論の影響が大きいと思います。お世話になったのは中本博通先生（社会学）です。先生の研究室に入り浸り、社会調査を手伝っていました。当時関西一円の未解放部落（被差別部落とも言う）の大掛かりな調査で、卒業後も続けていて、結局4月の就職の機会を逃すはめになったが、この調査が第二の社会への開眼でした。日本が部落問題という深刻な社会問題をかかえていることをはじめてデータで知ったのです。

その後豊中市や尼崎市の福祉事務所で働き、その他福祉の現場にこだわりつづけ、最後は尼崎市の教育委員会を定年退職しました。この間働きながら四年制大学卒の資格を得て立命館大学の大学院で学びましたが、この間のことは時間の関係もあり省略します。原点と言うときどうしても幼少期から青年前期にかけての話が重点にならざるをえませんので、ここで前半は終わります。

## 2 公的扶助論をどう学ぶか

公的扶助論ばかりでなく社会福祉の関連科目，〇〇論なるものには制度の解説が横行している。これは学問ではない，今社会福祉研究全般のレベルが低下している証拠ではないでしょうか。社会福祉原論などはひどいもんです。私がこの度出版した『社会福祉原論』（文理閣）は今の学問の退廃に対するアンチテーゼの意味をこめました。

公的扶助論の勉強で一番大切なことは貧困を生み出してくる社会の構造を学ぶことです。そのことの意義は何だろうか。貧困を生み出してくる社会の構造を学ぶことによって私たちは、貧困は個人の罪ではない、それを生み出す社会のしくみがある、こういう知の力を働かせる。それによって、生活保護を受けている人に後ろ指をさしたり（スティグマと言います）、窓口で生活保護の相談に訪れる人を十分話も聞かないで追い返したり、実際に今現場では「水際作戦」と称してこの違法行為がまかりとおっているが、このようなことが克服されていくのです。それはすなわち、理論と現実をつなぐ学び方でもあります。

19世紀の最後の30年間と20世紀初頭は現代社会福祉の萌芽と社会調査の時代でありました。この時代にチャールズ・ブースのロンドン調査と、すこし遅れてシーボーム・ラウントリーのヨーク市調査があったことを思い出してください。この調査はさまざまに評価されていますが、公的扶助論からその意義を再確認しておきたいと思います。ブースもラウントリーも「貧困は個人の怠惰や生活態度からやってくるよりも、圧倒的に雇用＝労働力の再生産のしくみに問題があるからだ」「なぜ貧しいのか⇒雇用の問題である」ことを具体的なデータであきらかにしたことです。具体的なデータの中身は皆さんすでに学んできているのでここでは省略します。

## 「ワーキングプア」「格差社会」

そこでブースとラウントリーの考えを今の日本に引きつけて考えてみたいと思います。最近みなさんは「ワーキングプア」「格差社会」という言葉をよく耳にするでしょう。

「ワーキングプア」というのは必死に働いても豊かになれない人々のことです。その第一類型である女性の雇用関係を見ると、二人に一人は非正社員（配付資料3、本稿では省略している）。時給、よくて日給で働く人々で、その多くはボーナスや有給休暇もなく、普通の労働者が加入する社会保障からも排除されている場合すらあります。中でも母子家庭の困苦は今も昔も変わっておりません。母子世帯の80%は就労しており、正規雇用は40%、非正規50%、正規雇用の割合は年々減少している（平成15年度全国母子世帯等調査）。一般世帯の平均年収589万円に対して母子世帯のそれは212万円です。二つのパートタイマーを掛け持ちで十数時間、夕方4時に第一のパートを終わり、子どもたちに夕食を準備してまた二つ目のパートで深夜まで働く、それでやっと二百数十万の収入です。

「ワーキングプア」の第二の類型は若者たちである。20歳から24歳の青年の33%が非正規雇用であり（配付資料2、同省略）、低賃金で生活している人々です（約40%の人は月収10万円以下、他の40%は10万円から20万円、配付資料4、同省略）。資料はすこし古い統計ですから非正規雇用は今もっと増えているでしょう。総務省労働力調査では1995年から2005年に正規雇用は446万人減少（21%減）し、非正規雇用は590万人増加（31%増）しているからです。おおまかに言って、日本の雇用者の三人に一人は非正規雇用であり、女性と若者は二人に一人が非正規雇用だと言われています。

生活保護世帯を世帯類型ごとに分類してみると、高齢者世帯46.4%（内単身40.6%）、傷病・障害世帯35.8%、母子世帯8.7%、その他の世帯9%となっ

ているが、問題は捕捉率が低いこと、つまり生活保護が必要な人すべてに適用されていないことにあります。厚生労働省が捕捉率の統計を取らなくなってから久しいので、正確のところはわからないが、過日の「貧困、不平等、社会的公正に関する日米シンポジウム」では約20%しか捕捉されていないとの推計が報告されています。捕捉率が高ければ10万円以下の不正規雇用の人々はその他の世帯9%に入り、その他の世帯の9%ははねあがるにちがいません。

「格差社会」に話を移します。格差社会の指標がジニ係数だが、ジニ係数とは所得の不平等を計る尺度であって、ジニ係数が1に近いほど所得格差が大きい、不平等な社会だということになる。高度成長の最後期1972年のジニ係数は0.353で、2002年のそれは0.498であるから確実に格差は広がっている。なぜ格差が広がっているのか、これを解明することが現代の母子家庭の貧困問題を解くカギになります。

カギは日経連の「新時代の日本的経営」1995年にある（配付資料1、省略）。「新時代の日本的経営」は労働者を三つに階層化することを提案し、事実その後着実に実行されてきた。労働者を①長期蓄積能力活用型、これは大企業の管理職、総合職、技術部門の基幹職等であり、高給と終身雇用を保証する。②高度専門能力活用型、これは企業の企画、営業職でかならずしも終身雇用が保障されているわけではないが、社会保障で一応生活は守られている。③雇用柔軟型、これは一般職のほか派遣社員、非正規雇用であって、企業の都合で切り捨てられたり、好景気にはまた会社に吸収されたり、流動化される労働力で、この階層の増大が格差を拡大していること、その実態は「ワーキングプアー」の項でのべたとおりであります。ここで押さえておきたいのは、階層化された日本の社会保障の最底辺に位置する人々が雇用柔軟型層であり、公的扶助＝生活保護制度に最も近い位置にいます。母子家庭の多くはこの階層に属するが、母子家庭についてももうひとつ触れておかなければならないのが日本独特のM字型雇用形態（配付資料、省略）で



す。M字型雇用形態とは、女性の労働力率が20～24歳で最も高くなり、その後下降し始めて30～34歳で最も低くなり、35歳以降再び上昇していくことを統計的に図表化したものです。これを具体的に述べてみると次のようになります。多くの女性にとって、学校を卒業して最初の就職は正社員だが、しかし日本の雇用環境は子育てと仕事の両立が困難で、子育て繁忙期にはいったん退職する。夫が企業戦士ほどその傾向は強いと言えます。子どもが成長して手がかからなくなるころ、労働市場に出ようとするともうパートタイマーなどの非正規雇用しかありません。この間に母子家庭になるとワーキングプアーになるほか道はないのであります。

このように分析してみると現代のワーキングプアー、また生活保護世帯は決してその人の責任でそうなっているのではなく、雇用慣行＝社会のしくみがつくりだしていることがよくわかります。学生の皆さんは懸命に勉強して、社会への開眼を果たさなければなりません。

### 3 結論「福祉が人を殺すとき」

ここに『福祉が人を殺すとき』（寺久保光良・あけび書房）という本がある。母子家庭の母が二人の子どもを残して餓死した札幌市にあった事件で、子どもたちにはカップラーメンを食べさせていたが、自分は何も食べず、コタツの中で衰弱して死にました。母は喫茶店に勤めていた、この店の主人が心配して福祉事務所に再三電話しているのですが、福祉事務所はほんとうに困っているならまたくるだろうとたかをくくって家庭訪問もやりませんでした。実はこの母は以前福祉事務所に相談に行ったのですが、ていよく追返されており、あんなおそろしい所にはもう二度と足を踏み入れたくないと書いていたそうです。まさに政策の背景とともに現場の社会福祉主事の人間性が問われた事件でした。もし母子家庭の生活の困苦を社会の構造的背景の中で理

解していたなら、社会福祉主事はどうしただろうか。たぶん生活の苦しみを傾聴し、その人の生活に共振しただろうと思います。皆さんもどうぞそのような福祉の担い手になってください。

もうひとつは、生活保護抑制政策に対してたたかう立場に立ってください。たたかう立場とは何か、方法は無限にあります。たとえば民間の支援団体と連帯する、公的扶助研究会などの研究運動に参加する、生活保護者の不服申し立て、行政訴訟の支援団体に加わる。そして何よりも国の監査官と論争する力を身につけることです。

さらに私は学生諸君に期待したい。些末な技術主義にはまるな、制度の解説が社会福祉の勉強だと錯覚するな、社会構造と社会のありかたについて深く学ぼう、感性をみがく、人生を描いた映画、文学、写真集に親しむ、先にのべたようにリベラルアーツの役割は大事であります。

最後に、人間は生涯を通して発達します、別紙資料をお読みください。この新聞記事は、「学校は大嫌いな所だった」宮本延春さんの話です。中学卒業までいじめを受け続け、オール1の落ちこぼれでした。24歳で定時制高校に入り、その後猛勉強して名古屋大学理学部に入り、大学院をへて母校の高校教師になった人のものがたりです（残念ながら新聞記事の掲載は割愛させていただきます。2007年1月4日付朝日新聞をごらんください）。

学生の皆さん、本日、学外からご出席いただきました社会人の皆さん、副理事長をはじめ、先生方、事務方の皆さん、その他大学関係の皆さま、本日はまことにありがとうございました。わずか6年間の岐阜経済大学の教育・研究生生活でしたが、あらためて感謝申し上げます。